



目の冒険

錯視の話④

北岡 明佳

日本心理学会が、中高生を対象に、錯覚に関する話題と作品を募集している。「小・中・高校生のための心理学を学ぶ教育プロジェクト」の一環である。大学に入って初めて学ぶこ

とになる心理学について、あらかじめ少し知識を持つてもらおう、という学会の宣伝活動である。その第一弾がコンテ

このコラムでは、少し手ほごきをしてみたいと思う。「錯覚の創作」のやり方については来週取り上げる(こととして、今週

も、待合室の雨よけの鉄板のすきまから見ると、少しずつずれて一直線上にあるように見えない。しかし、同下のように裏から見れば鉄棒はまっすぐであることがわかる。この写真の高雄口駅は、京都市内を走る京福電鉄の駅である。錯視は、自然なものよりも、人工的なものによく見られるのである。

ずれて見える直線棒

ストというわけだ(「不思議な感覚体験の創作・発見コンテスト」http://www.soc.nii.ac.jp/jipa/)。

実は、錯視は誰でも毎日どこかで経験している。写真上は、「高雄口駅のポッケンドルフ錯視」である。交差している2本の鉄の棒どちら

は「錯覚の発見」についてアドバイスしてみたい。

錯覚のネタ収集に街に出る前に、東京大学の駒場キャンパスで開催中の錯覚展(9月18日まで)入場無料、http://td.bl.c.u-tokyo.ac.jp/~bihaku/2005.htm)を訪れるのもよい。(立命館大助教授)